

きゅうりは、ヒマラヤ山脈山麓地帯が原産のウリ科野菜。
現在のきゅうりは品種改良が進み、野菜消費量は果菜類トップ。むくみ改善の効果があるといわれている。
ウリ科の中では比較的冷涼な気候を好む。栽培適温は昼間23～28℃、夜間13～17℃、地温18～22℃である。

栽培ポイント

- ・きゅうりは酸性に弱く、好適pHは6.0～7.0とされる。
- ・高温や乾燥の影響を受けやすいので土づくりをしっかり行う。有機質に富んだ通気性・保水性のある土に適する。
- ・連作は避けるほうがよい。

栽培カレンダー

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
一般地				○	△	□						
		○ 播種		△ 定植			○ △	□		□		
							□ 収穫					

栽培手順

1.育苗

育苗培土には有機質に富んだ通気、排水性のよい土を使用し、3号ポットに播種する。
接木苗ならば、病害、連作障害対策になる。

2.定植

堆肥、土壌改良材は定植1ヶ月前に、有機質肥料は2週間前までに施用し、土によくなじませておく。
定植は畝幅100cm、株間60cmとし、本葉3～4枚の健全な苗を選ぶ。

3.誘引と整枝

誘引は本葉5～6枚時までに行います。誘引と同時に下位側枝は5節までを早めにかきとる。
5～10節までの小枝は各節1節摘芯とします。11節以降の小枝は2節摘芯とする。孫枝は放任とし、混み合えば摘芯する。つるが伸びてきたらネットに誘引する。

支柱立て・整枝・誘引

中間型

親づるは支柱の高さ(160cm)程度で摘芯。
中段以上の孫づるは放任し、隣の株の枝とぶつかるようなら適宜摘芯。力強い生長点のある枝を必ず3～4本残す。
子づるは葉を2枚残して摘芯を基本とする。
下段から発生する孫づるは地面につかないように葉を1～2枚残して摘芯。
下から5～6節までの側枝と雌花は早めに除去。
この時、キュウリや台木の子葉があれば除去する。いつまでも残すと病害虫の発生源となりやすい。

— 親づる・子づる
— 孫づる

この部分が茂りすぎると病害発生や収穫忘れが多くなるので注意。スッキリ摘葉がイチバン!

子づるは本葉2枚を残し、その先で摘芯する。子づるの1節目に着果する。

↑ 親づる摘芯
摘芯
子づる
子づる

↑ キュウリの整枝。中段以降の子づるは2葉残して摘芯する。

↑ 株元から5～6節までの雌花、側枝を早めに除去。



キュウリの支柱誘引。



ネット誘引。つるがネットの上まで伸びたら摘芯する。

きゅうりの誘引・整枝・支柱立ての例

4. 灌水・追肥

定植前に十分灌水しておき、定植後は晴天日には毎日灌水し活着を促す。活着後は灌水量を減らし、深層への根張りを促進させる。収穫開始時より灌水量を増加気味に管理する。追肥の1回目は子づるの収穫が始まった頃に行い、窒素成分で2.5～3.0kgを株間に施用し軽く中耕する。その後は、生育を見ながら15日おきに同様に行う。

5. 摘葉

病葉や古くなった葉は取り除き、若い葉や生長点に光を当て、通気性をよくする。

6. 病虫害防除

病気は、うどんこ病、べと病、褐斑病、斑点細菌病、灰色かび病などが発生しやすいので注意する。害虫は、アブラムシ、アザミウマ類、コナジラミ類などが発生しやすい。

7. 収穫

収穫は果長20～22cm、1果重90～100g位のものが収穫適期。朝採りを原則とするが、最盛期には開花から7～8日で収穫適期果実になるので、夕方朝の見落とし分を収穫する。